

山代温泉のエスペランティスト

橋 弘 文

1 はじめに

2010年8月、わたしは加賀市総合民俗調査¹⁾のために、加賀市の山代温泉地区で聞き書き調査をおこなっていた。山代の調査では、いつも山代在住の舟見武夫さんにお世話になっていた。舟見さんは、温泉観光地である山代の過去の生活を記録するという調査の趣旨を的確に理解していただき、山代での聞き書き調査のコーディネーターの役割をしてくださった。舟見さんごじしんも丹念な調査をもとにして、かつての山代の小字名の解明など、山代の過去の暮らしについて精密な研究をされている。また、舟見さんは山代の過去の生活についておどろくほど覚えておられた。わたしはたびたび舟見さんに山代の過去の生活について話をきかせてもらっていた。

2010年8月20日、舟見さんは夏の土用の丑湯と丑の日の海水浴について、つぎのような話をしてくれた。

山代では昭和30年代まで、無病息災を祈願して夏の土用の丑の日に共同の温泉場である総湯に入浴するという習慣がみられた。この夏の土用の丑の日の入浴は丑湯といわれた。とりわけ丑の時刻(午前2時ごろ)に入浴すればご利益があると信じられていたので、丑湯の日には総湯は夜通し開いていた。山代の人たちだけでなく、丑湯目的の温泉観光客も大勢山代を訪れた。とくに越前の坂井郡あたりからの客が多かった。丑湯客の多くは、源泉から温泉を引き入れた風呂をもたない、いわゆる「木賃宿」に宿泊した。山代の方でもだまって丑湯客の来訪を待っていたわけではない。夏の土用の丑の日が近づくと、宣伝カーをこしらえて福井県の三国や丸岡へ行き、「山代音頭」を流しながら丑湯の宣伝をした。戦後、山代の若者たちのあいだで、夏の土用の丑の日に海

水浴がブームになった。若者たちは丑の日に海水浴するために、自転車や原付バイクで橋立へ行った。

丑湯と丑の日の海水浴の話しにつづけて、どういうわけか、舟見さんは、山代に住んでいたエスペランティストの竹内藤吉について語ってくれた。昭和3年(1928)生まれの舟見さんの子どものころのことだった。竹内藤吉は丸い帽子をかぶり、ひざまでの長さのマントをはおり、いつも四角い鞆を持っていた。竹内藤吉の話し方には一つの特徴があった。「ら・り・る・れ・ろ」の「r」の発音が巻き舌の、べらんめー調の発音だった²⁾。子どもの舟見さんには、この発音が怖く感じられた。竹内藤吉はヤギを飼っていて、ときどき舟見さんの母のところにヤギの乳をもってきた。また竹内藤吉は子どもの舟見さんにエスペラントの本をくれた。戦争中、竹内藤吉は戦争のために帰国できなくなっていたフランス人をじぶんの家に住まわせていたという。

北陸の温泉町でエスペラントに励んでいた竹内藤吉とは、どのような人間だったのだろうか。そして戦時期に竹内藤吉の家に滞在していたフランス人とは、いったいだれなのだろうか。

残念ながら、山代では舟見さんのほかに、竹内藤吉に会ったことのある方や竹内藤吉のことを聞き伝えている方にお会いすることはできなかった。そこで関西エスペラント連盟に連絡をとり、竹内藤吉にじっさいに会ったことのあるエスペランティストはおられないか、と尋ねた。関西エスペラント連盟では金沢在住のあるエスペランティストを紹介してくださった。その方に電話で連絡したところ、現在、竹内藤吉のことを一番よく知っているエスペランティストは金沢在住の松田久子さんであろうと教えていただいた。

わたしのエスペラントについての知識は、小学校5年生の国語の教科書に載っていたザメンホフの伝記をか

すかに記憶している程度の薄弱なものだった。わたしは豊中市にある関西エスペラント連盟の事務局を訪ね、関西エスペラント連盟の峰芳隆さんにお会いし、峰さんからエスペランティストとエスペラント運動についての基本的なことがらをご教示していただいた。わたしは峰さんからさまざまな興味深い文献やエスペランティストの活動を教わった。

峰さんのエスペランティストとエスペラント運動についての解説は、それらにかんするわたしの知識の量を増やしてくれたにとどまらない衝撃をわたしに与えた。峰さんの話を聞いているうちに、わたしはエスペランティストとエスペラント運動についてのじぶんの無知を再確認するとともに、エスペランティストたちが暮らす別な世界に迷いこんでしまったかのような感覚におそわれた。松田久子さんや若いエスペランティスト新田隆充さんたちに出会い、ますますこの感覚は増幅していった。

エスペランティストだけの居住区やムラやマチはなく、エスペランティストは地域共同体を形成していない。エスペラントによって織りなしてきたエスペランティストのネットワークの存在をわたしははじめて知り、おどろいた。日本の近現代の社会のさまざまな結節点にエスペランティストがかかわっていた。またエスペランティストは、「グローバル化」が喧伝される以前から、楽々と海外のエスペランティストと交流してきた。文通や電子メールによる交流だけでなく、海外からじっさいにエスペランティストが日本にやって来た。そのさい、日本のエスペランティストは海外からのエスペランティストを遠来の客として自宅に宿泊させる。日本のエスペランティストが海外を訪れ、そこで在地のエスペランティストの家に宿泊するという逆の場合もある。つまり、エスペランティストのあいだにはゲストをホストがもてなすというホスピタリティがあたりまえのように実践されてきたといえる。

峰さんのご教示によって、山代の竹内藤吉の家に滞在していたフランス人の正体は、すぐに明らかになった。そのフランス人が山代の竹内藤吉の家に一時期滞在していたという事実は、エスペランティストにとって周知の事実だった。本名ウジェーヌ・アダム (Eugène Adam)、エスペラント名ランティ (Lanti) は、昭和12年(1937)5月から9月までの約4ヶ月間を竹内藤吉の家に滞在し、山代ですごした。

ランティが滞在した昭和12年の山代はどのような町だったのだろうか。山代温泉は、伝説によれば行基に発見され、花山天皇に再発見され、明覚に整備された。お

そくとも徳川時代後半には十数軒の旅館が温泉客をむかえていた。山代はいつも客＝ゲストをむかえるマチとして成立していた。ランティも山代に来訪したゲストの一人といえる。ただしランティは多くの温泉客とことなり、旅館にではなく竹内藤吉という個人の家に滞在した。竹内藤吉はランティというゲストをもてなすホストの役割をになっていた。

ランティが滞在した山代温泉はホスピタリティの空間であり、エスペランティストの交流はホスピタリティを中核にしていると思われる。この稿では、山代温泉における、竹内藤吉とランティという二人のエスペランティストの交流を、ホストとゲストという関係、すなわちホスピタリティの視点から考える。

2 ゲストのランティの到着³⁾

ランティ (ウジェーヌ・アダム) は1879年にフランスのブルターニュに生まれた。かれは小学校教育を受けた後、家具職人の技術を身につけ、職工学校でその技術を教えた。第一次世界大戦に出征したランティは戦場の塹壕のなかでエスペラントを習得したという。戦後、ランティは搾取と暴力のない社会を実現するための手段としてエスペラントを位置づけた。ランティは共産主義社会を理想とし、エスペラント運動は共産主義社会の実現にむかう労働者運動に呼応し、エスペランティストは民族や国家を離れた意識をもつべきだと主張した。

1921年8月、プラハでランティは労働者階級によるエスペラントの組織、「Sennacieca Asocio Tutumonda」(SAT)＝「全世界無民族(国家)協会」を創立した。当初、約80人の会員から出発したSATはしだいに勢力をのばしてゆく。

SATの発展にはソビエトのエスペランティストたちの活動が貢献していた。1922年にランティはソビエトを訪れた。ランティはソビエトの現実を自分の目で見て、ソビエトの社会主義政策に疑問を感じる。ランティの理想は、世界中の労働者が世界共通語(エスペラント)をもとにして連帯し、世界革命を起こすことだった。ソビエトの現実にはランティの理想とかけはなれていた。ソビエト愛国主義のにおいに敏感に反応したランティは「反ソ的」とみなされ、SATの中核メンバーでもあったソビエトのエスペランティストから非難され、やがてSATは分裂した。

1936年10月5日、ランティはリスボンからノルウェーの貨物船Tigro号に乗船した。Tigro号は11月28

日に横浜に到着した。横浜に上陸したランティは東京に移動し、文化ホテルに滞在する。東京の警察がランティを監視し、ランティがエスペラントと会って交流することを禁止していたために、ランティは孤独な数ヶ月を送らなければならなかった。エスペラントによる手紙のやりとりが東京でのランティの交流の中心になった。山代に住む竹内藤吉もランティの文通相手の一人だった。

ランティは来日前に、竹内藤吉が出版した『Budao』を読んでいたらしい。竹内藤吉は、P. Lakshmi Narasuの“The Essence of Buddhism”の一部を岡本好継の日本語訳で読み、それをエスペラントに翻訳して1933年に自費出版した。ランティは仏教に興味をもった。かれは東洋文化の神秘主義的な側面ではなく、仏教が唯一神をもたず、仏教の創始者のブッダが神の子や預言者とも主張していないところや仏教のもつ倫理性に関心をもっていたと思われる。ランティは竹内藤吉の『Budao』に刺激されてNarasuの原著を読んだ。竹内藤吉のエスペラント訳が十分なものではないことにランティは気づいた。

1937年3月30日と3月31日の『信濃毎日新聞』の学芸欄に「蘭亭氏を迎へる」と題する竹内藤吉の投稿記事が上下に分かれて掲載されている。それによれば、ランティが東京に滞在していることを知った竹内藤吉は、ランティに山代に来てほしいという旨の手紙を出した。これに対して1月18日付けのランティの返信を竹内藤吉は受けとる。竹内藤吉によれば、ランティは竹内藤吉に宛てた手紙で、「四千冊の本を賣つたり、やつたりして巴里を立つたのに小冊子佛陀を筒の中に入れてきた今其譯者からまねかれようとは思ひもよらなかつた、不思議な事だ私は信仰がない、佛教には心ひかれる、四五ヶ月東京で、二三ヶ月京都で暮す考へだ、其後の豫定はないから都合で寄る」と書いていたという。その後、竹内藤吉は1937年の3月10日すぎにランティに手紙を出し、5月の初旬にランティをむかえに東京に行った。ランティは竹内藤吉に連れられて山代温泉に向かった。おそらく二人は国鉄・大聖寺駅で温泉電軌鉄道(温電)に乗り換え、30分ほど電車に乗り、5月3日に山代に到着したと思われる。

3 1937年の山代温泉

山代には東口駅と西口駅という二つの駅があった。温泉客の多くは西口駅で降りた。西口駅に降り立つと温泉

の湯の香りが漂ってきた。西口駅から徒歩5、6分のところに源泉が湧いていた。源泉のすぐそばに源泉から温泉を引いた共同浴場=総湯の二階建ての建物があった。総湯の一階に湯壺があり、二階には大広間と食堂があった。総湯は広場の中心に建ち、総湯に面して源泉を引き入れた内湯の設備をもつ18軒の旅館が建ち並んでいた。山代では総湯のまわりは「湯のがわ」とよばれていた。

ランティが山代を訪れた1937年当時営業していた湯のがわの旅館は、〈大野屋〉、〈くらや〉、〈あらや〉、〈松の家〉、〈山下家〉、〈吉野屋〉、〈たまや〉、〈田中屋〉、〈白銀屋〉、〈西野屋〉、〈加茂屋〉、〈花屋〉、〈木屋〉、〈七日市屋〉、〈吉田屋〉、〈やまや〉⁴⁾。このうち、〈あらや〉と〈くらや〉は「山代は〈あらや〉、〈くらや〉」といわれるように山代温泉を代表し、皇室が宿泊する格式高い旅館だった。大正時代に北大路魯山人が山代温泉に来たとき、魯山人は〈吉野屋〉の別荘に滞在した。毎年11月ごろに、橋立の北前船の船頭たちが山代温泉を訪れ、〈加茂屋〉と〈出蔵屋〉に翌年の2月ごろまで滞在した。〈松の家〉は、〈あらや〉と〈山下家〉のあいだの小さな旅館だったが、源泉に一番近い旅館だった。そのため〈松の家〉では山代温泉のなかでもおいしい温泉卵ができたという。

山代温泉には湯のがわから離れた場所にもいくつかの旅館があった。それらの旅館は直接に源泉から湯を引く権利をもっていなかった。山代ではそれらの旅館は「木賃宿」とよばれていた。源泉の湯を桶に汲んでリヤカーで運び、旅館の風呂を立てる木賃宿もあったが、木賃宿の泊まり客の多くは総湯を利用した。

ランティが数ヶ月間すごした竹内藤吉の家が、山代のどのあたりにあったのか、わたしはまだ調べていない。1964年に竹内藤吉が亡くなったとき、山代の竹内藤吉の家を訪れた伊東三郎は、竹内藤吉の家は「町はずれの茂みの中の電灯のない一軒家だった…そこには水溜りが池になり、蓮の花が咲いていた。雑草の中の軒の破れた家だった」⁵⁾と書いている。温泉の排水が総湯や湯のがわのある場所から町の北側の低地に流れた。温泉の排水が流れ込む場所は湿地となり、おもにレンコンが栽培されていたという。竹内藤吉の家は総湯と湯のがわから見えて北側の町はずれのレンコン畑の近くにあったのかもしれない。もしそうなら、ランティと竹内藤吉は温電の東口駅で降りたかもしれない。

ランティは竹内藤吉の家にじっと潜んでいたわけではない。山代の町を歩きまわったと思われる。ランティの

手紙に温泉に入浴した記述がみられるが⁶⁾、おそらくランティは湯のがわの旅館のお風呂ではなく、総湯に入浴したのだろう。総湯ではランティは人びとの好奇心の対象になっていただろう。とくに夕方すぎにランティが入浴していたら、夕食を終えて総湯にぞくぞく来る山代の子どもたちの注目の的になっただろう。けれどもランティの方でも日本の子どもの行動を観察したと思われる。もし、ランティが午前中に総湯に入浴したなら、女湯で交わされる芸妓や旅館の接待（仲居）の声を聞いただろう。

ランティは総湯に行ったときに、湯のがわを一回りしたにちがいない。ランティは湯のがわに立ち並ぶ旅館を見、伝統的な菓子屋を発見し、どんな味の菓子だろうかと興味をもっただろう。その菓子屋は、もともとは湯のがわで豆腐屋をしていたといわれている。あるとき、旅の者を泊めたとき、その旅人がお礼に菓子の製造方法を教えてくれ、以後、菓子屋をはじめようになったと伝えられている。

仏教に関心をもっていたランティは、総湯の近くにある二つの寺を見に行っただろう。まず、総湯の西側にある専光寺。ランティは大きく反り返った瓦屋根を見上げただろう。冬の日、わんぱくな子どもが雪の積もった大屋根の上をすべりおきて遊ぶという話をランティが聞いたなら、少しばかり喜んだにちがいない。毎月2回おこなわれる専光寺のお講にでくわしたら、ふだん静かな専光寺の境内に人びとが集まりにぎやかなにおどろいただろう。専光寺のすぐ近くに酒の蔵元の大きな屋敷があった。ランティは造り立ての日本酒を味わうことがあっただろうか。

総湯の南側の薬王院にもランティは訪れたと思われる。総湯の浴室に薬王院のお札がはってあるのにランティは気づいていただろうか。もし、ランティがたまたま8日に薬王院を訪れたなら、八日講で集まってきた湯のがわ18軒の旅館の主人たちの姿を見かけただろう。また、薬王院に12日に行ったなら、十二日講のために薬王院に集まってくる木賃宿の主人たちに出会っただろう。ランティが薬王院のうしろの坂道を進み、小高い万松園の山に登れば、遠く白山連峰をながめることができただろう。視線を下方にずらせば、薬王院の西側の丘に陸軍病院（金沢衛戍病院山代分院）の洋風建築が見えた。

湯のがわの界隈でランティは芸妓が歩く姿をしばしば見たことだろう。数件の置屋が薬王院の近くにあった。またランティは仕出し屋の人が料理を旅館に運んでゆく

ところに出会ったかもしれない。湯のがわの旅館では水が出なかった。井戸を掘っても出るのはお湯だけだった。旅館の料理は山代の仕出し屋が作っていた。仕出し屋は毎朝、旅館へ出むき、注文を受け、旅館の器をもって帰り、夕方、器に盛りつけた料理を旅館に運んだ。好奇心の強いランティは仕出し屋まで行ってみただろう。置屋のとなりにあるその仕出し屋の主人は川魚の料理の達人だった。まな板の上でびちびちと暴れるコイが、この料理人にスーッとやさしくなでられると急にしずかになったという。ランティはウナギをさばく料理人の技術に感心し、料理人が金槌で雷魚をたたく音に少しおどろき、料理人がダイコンでツルとカメをこしらえているところじっと見ていただろう。気がつけば、ランティのまわりに店先で料理人の技術を感じてながめている温泉客がいただろう。

家具職人の技術をもっていたランティは山代の町を歩いているとき、やきものをおさめる木箱を作る職人の仕事に見入ったことだろう。山代にはやきものを作る寿楽窯と菁華窯があった。山代に来るのが30年おそかったら、ランティは須田菁華の店でバーナード・リーチに遭遇し⁷⁾、リーチから日本のやきものについて教えをうけることができただろうに。

総湯と湯のがわを中心とした山代の町は小さく、すこし歩けばランティの目前に田畑があらわれた。ランティが山代に到着したころには、山代では田植えはほとんど終わっていたと思われる。田植えの後、山代の人びとは蓮如忌の吉崎御坊へ参詣した。山代から大聖寺まで温泉に乗り、大聖寺から吉崎まで船で行った。

山代の町にはいくつか地蔵像が祀られている。ランティは散歩の途中、ある地蔵像に供えてある菓子に手をのばし、食べてしまった。ランティは食べた菓子の代わりに小石を置いて去った⁸⁾。

川崎ナオカズは「Lantiの食と住」⁹⁾で、ランティの散歩のようすをつぎのように書いている。

Lantiは竹内と山代で共同で仕事していたとき、かれはよく散歩した。そして茶店に立ちよってビールを飲んだ。茶店のおやじは、ツリをやるので、自分のつったアユをLantiにビールのさかなにだした。しかしコトバは二人のあいだに通じない。Lantiはアユに対する代金を支払うことに気づかず「アリガト」ですべてがおわったという。

ランティが山代に到着して日の浅いころ、ランティを

おどろかせる事件が山代で発生した。5月12日の午前1時半ごろ、山代の光楽寺付近から出火し、120軒の家が全焼する大火事が起こった。火事の原因は放火だった。総湯や湯のがわは風上に位置していたために延焼をまぬがれた。山代の大火の後、竹内藤吉は5月23日の『北国新聞』の投稿欄「豆タンク」に「山代大火をかへりみる」と題する記事を投稿している。当時の新聞報道では、光楽寺の僧と関係のあった女性が僧との別れ話のもつれから放火したとされており、放火犯人だけでなく、火元となった光楽寺の僧にも非難が集中した。こうした雰囲気において竹内藤吉は、「火元の僧が情婦を持つてゐたとしてもその事が僧職を取上げる理由とならぬ事は、我々が情婦を持つた人々を町議や縣議として選出してゐる事をかへりみて自認せねばなるまい」と異を唱えている。

1937年7月7日の廬溝橋事件を契機にして、日本は中国と本格的に戦争をはじめた。7月末から激化した戦争は山代温泉にも影響を及ぼした。前述したように山代には陸軍病院があったが、日中戦争で負傷した傷病兵の数が増加したために、陸軍病院だけでは対応できなくなった。そこで山代温泉の旅館に軽傷の兵隊を分宿させることになった。温泉客がのんびり過ごすという旅館の風景は一変したが、山代の旅館は経営的には兵隊の分宿によってプラスになったといわれている。ランティは変貌する山代温泉の風景をどのように見ていただろうか。

4 ホストとゲスト

竹内藤吉は結婚していなかった。おそらく男二人の生活が展開した。ランティは竹内藤吉に宿泊代を支払っていた。どうやら、竹内藤吉の家はランティにとって居心地のよいところではなかった。毎日警官が家に来て何時間も竹内藤吉と話し込んでいた。これはランティの安全をおびやかし、ランティを不安に陥れた。また山代にいるあいだにランティの左手に腫瘍ができた。じわじわと腫瘍はランティを苦しめてゆく。しかし一番の問題はコミュニケーションが十分にとれないことだった。竹内藤吉のエスペラントの実力ははなはだ心もとなかった。松田久子さんは、竹内藤吉はランティとエスペラントで議論することはできなかったのではないかと語っている。さらに両者に共通する自己主張の強さが、ますます二人の関係を悪化させたと思われる。

おそらく竹内藤吉じしんもホストの役割をきちんと果たしていないことを感じていたと思われる。竹内藤吉は

川崎直一に宛てた1937年6月11日付けの手紙で「私のエスペラントがものになって居ないのですっかり弱っております。それに私のエスペラントも進歩しないし先生の日本語も気がないので、さっぱりものになりそうにありません」¹⁰⁾と書いている。

山代は温泉客をはじめとするゲストをもてなす町だった。ところがランティにとって山代はホスピタリティあふれる場所にはならなかった。もし、竹内藤吉が山代の町の人びとにきちんとランティを紹介していたなら、山代の人びとは、ランティとことばは通じなくとも、ランティが警察の注意人物であったとしても、竹内藤吉にあってランティをもてなしたであろう。竹内藤吉は、そうはしなかった。おそらく竹内藤吉は山代において人と人との関係を十分に築きあげていなかったからではないだろうか。

山代には「預金講」という仲間集団がある。成人する前後に気のあう友人たちが数人集まって預金講を作った。毎月、集まって会食したり、積み立てた会費で旅行に出かけたりした。なにより預金講は葬式の運営に力を発揮した。預金講の仲間が亡くなったとき、あるいはその家族が亡くなったとき、その預金講のメンバーが葬式をとり仕切ることになっていた。だから山代では預金講に入っていない者は、まともな葬式ができないといわれていた。

たぶん竹内藤吉は預金講に入っていなかったと思われる。もしかれば預金講に入っていたなら、預金講の仲間がランティをきつともてなしたであろう。

竹内藤吉は宮大工をしていたらしい。戦後、竹内藤吉は金沢の松田周次・久子夫婦の家をしばしば訪れた。そのとき竹内藤吉がよく話題にしたのは、山代温泉のことではなく、かつて仕事で訪れた信州のことだったという。「蘭亭氏を迎へる」を『信濃毎日新聞』に投稿していることから推測すれば、竹内藤吉は信州にも生活の拠点をもっていたのかもしれない。しかし、少なくとも山代では竹内藤吉は預金講にも入らないよそのものとしてみなされていたと思われる。竹内藤吉は山代にとってゲストの一人だった。ゲストの竹内藤吉がゲストのランティをもてなすことじたい、そもそも不可能な企てだったと思われる。

注

- 1) 加賀市総合民俗調査は2007年から2010年までおこなわれ、2011年3月に報告書が刊行される予定。
- 2) ちなみに川崎直一『基礎エスペラント』(大学書林

- 1963) には、「ra, re, ri, ro, ru は、日本語の普通のラ、レ、リ、ロ、ルよりも、もっと舌の先をふるわして発音します。ちょっと江戸っこのペランメー式に。」と書かれている。
- 3) 山代に到着するまでのランティについては、ウルリッヒ・リンス (栗栖継訳) 『危険な言語——迫害のなかのエスペラント——』(岩波新書 1975)、坪田幸紀 『葉こそおしなべて緑なれ…』(リーベロイ社 1997)、野島安太郎 『中原脩司とその時代——エスペラント時事月刊誌 “Tempo” を中心として』(リーベロイ社 2000)、田中克彦 『エスペラント——異端の言語』(岩波新書 2007) を参照した。
 - 4) やましろ街事典編集委員会 『やましろ街事典』山代温泉観光協会 1996。
 - 5) 伊藤俊彦 「ランティと日本のエスペランティストたち (5)」『La Movado』434号 1987、の引用による。
 - 6) ランティの書簡集、*Leteroi de E. Lanti* (1984) に収録されている、1937年5月9日に山代からランティが出した手紙による。手紙はエスペラントで書かれており、新田隆充さんに読んでいただいた。
 - 7) バーナード・リーチ (柳宗悦訳 水尾比呂志補訳) 『バーナード・リーチ日本絵日記』講談社学術文庫 2002。
 - 8) 野島安太郎 『中原脩司とその時代——エスペラント時事月刊誌 “Tempo” を中心として』リーベロイ社 2000。
 - 9) 川崎ナオカズ 「Lanti の食と住」『Nova Rondo』10号 1968。
 - 10) 松本茂雄編 『大阪エスペラント運動史 第三部 回想編』柏原エスペラント資料センター 1979。